

V21b 分光器 DSS-7 の性能評価について

田辺健茲、古田智子(岡山理科大)、前原英夫

今年発売されたアメリカ SBIG 社の分光器 DSS-7 は、30 万円を切る低価格のため、使用に際してさまざまな制約があるものの、専門的な観測に使えると考え、我々はその性能を実際の観測を通して調べてみたので報告する。

分光器 DSS-7(Deep Space Spectrograph) は、以前同社により開発された分光器 SGS (Self Guided Spectrograph) をさらに簡便なデザインで設計されたもので、恒星から星雲、銀河にいたる分光観測に使える、というキャッチフレーズで発売された。SGS と比べると取り付ける望遠鏡の F 値が 10 に限られていること、使えるグレーティングが 1 種類だけ、ガイド機能は無し、適応している CCD は SBIG 社製のうちの 2 種類、というシンプルな設計であるが、調整が比較的簡単であることから、専用ソフト SPECTRA と併用することで容易にデータを取得、解析できるものと考えられる。

なお、スペックに関しては付属のマニュアル(英文)によれば、分散は $5.4 \text{ \AA} / \text{ピクセル}$ (=6000 $\text{\AA} / \text{mm}$)、resolution についてはおよそ 16 という記載があるのみである。

本年会では、おもに実際の恒星の観測を通して行った性能評価、ならびに恒星物理学への応用への可能性について発表する予定である。